

ダルい俺の日常

オリファルコン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

だるいこの世界とは、おさらばだ！俺は俺に釣り合う違う世界に行くぜ！と息巻いて旅だった自称ハードボイルドの人生を記した物語

目次

プロローグその1	1
プロローグその2	4
説明に聴き飽きただあ!?! 同感!	8

プロローグその1

プロローグ その1

この世界に面白いことなんてないのだと知ったのは、確か8歳の時だった。本、ゲーム、テレビなどなど、一般的に娯楽と呼ばれるものを全て経験し、飽きたのが6歳の時。それから2年間、面白いことを探し回ったが見つからず、年齢8歳にして世界に絶望をした。こんな時、3歳で読んだ小説には、面白いことを与えてくれる奴が現れるって書いてあったが、いつまでたってもそんな奴は現れず、そして俺は命を絶った。

はい、これで「俺」の物語は終わった。ここからは、「僕」の物語となる。

この世界に面白いことが溢れているとき付いたのは、確か8歳の時だった。ハント、タイム、そしてキルなどなど、一般的に8歳がするとは言われないことに次々と挑戦したのが、6歳の時。それから2年間、それをやり続けたが、飽きることはなく今日も元気に、近くのダンジョンや洞窟、大河を荒らし回っている。そして、そんな僕の前に現れたある一人のジジイによって、僕の人生は急加速した。そのジジイ、名はクラーク・アルテミアというらしい。僕が住んでいるこの国、アーサランス王国の七大騎士団の一つ

の元団長だ……ていうところまで読んでくれた人には申し訳ない。全くの嘘であることをここで謝る。そのジジイはただの放浪のジジイだった。若い頃に七大騎士団に入ろうと鼻息荒く、王都マリアーンに行ったらしいが、あえなく落第。失意のまま、マリアーンを後にして、ギルドのハンターとなるが、才能なく、年老いて、怪我をして引退。退職金を使つて、国巡りをしてきた、ただの放浪のジジイだった。その国巡りの最後の村がここだったらしく、退職金も尽きたので、死のうと思つてこのダンジョンに来たら、モンスターが全くないなかつた。不思議に思つて歩いていたら、ここについて、俺に出会つたらしい。

さて、話を現在に戻そう。

「おい、坊主、お前、七大騎士団に入ろうと思わんか？」

「すまん、ジジイ。ここまで聞いて来て、これを聞くのはとても失礼なことだと思うが、七大騎士団とはなんぞや？」

ジジイのアゴがガクンと物理的に下に落ち、目が比喻ではなく、マジで飛び出して、かけていた眼鏡を割つた。

「坊主、お前、この国生まれだよな……？」

「真正正銘、アーサランス王国の生まれのハードボイルドですが何か？」

「ならな、坊主、一つ教えといてやろう。この国において、いや、この世界において、七大騎

士団を知らんのは、お前くらいだぞ？」

なんだとく！今度は僕のアゴがガクンと物理的に下に落ちた。
続く！

プロローグその2

プロローグその2

ここで僕自身と読んでいる方々に向けて七大騎士団の説明をする。

七大騎士団とはアーサランス王国に数多く存在する騎士団の中でも、王国設立時に作られた七つの騎士団のことを指す。王国のエリート達が集結し、数多の重要任務を任せられる国民の尊敬の星である。七大騎士団はそれぞれ、違う場所を統括しており、最も強いとされる騎士団が王都の守護を任せられる。

王都担当

黄金騎士団

団長 ライア・ベルハザード

副団長 ユナ・クリスミア

団員数 4026人

設立年 アーサランス王国暦 4年

最も最古に設立された騎士団であり、王国で1番人気のある騎士団。王都守護を54年連続で任されており、数々の戦いでもNo.1の武功を挙げた。才能のあるものし

か、所属を許されず、入団しても退団を言い渡されることも多々ある。この騎士団の团长は王国騎士長の最有力候補でもある。

北部担当

紫蘭騎士団

团长 ジェイク・アースノルド

副团长 エレナ・ムーデンバード

団員数 2081人

設立年 アーサランス王国暦24年

王国の重要任務の中でも、機密任務や闇の任務を担当する別名「闇の騎士団」。団員は皆、仮面を着用しており、公の場では決して顔を出さない。各国や他の騎士団にもスパイを送り込んでおり、諜報員として王家からの信用は黄金騎士団について2番目に高い。この騎士団はこれ以上の情報は口外しておらず、秘密に包まれている。

南部担当

赤壁騎士団

团长 エンジ・ダルグリツシュ

副团长 ケージ・ザント

団員数 3564人

設立年 アーサランス王国暦7年

王国の盾と言われる騎士団。アーサランス王国の南部にある最大の敵ギーラ帝国の侵略を長年防ぎ続けて来た。南部を離れることは滅多になく、王都での知名度は他の六騎士団に比べて低い。1番死亡率が多い隊でもあるため、ここを生き残った者は騎士団員から尊敬される。ちなみに給料が1番高いのもこの隊である。他の騎士団員が修行のためよく訪れる。

東部担当

緑伯騎士団

団長 レイン・カズレード

副団長 アナ・ナギーカ

団員数 1542人

設立年 アーサランス王国暦43年

女性だけで結成された異色の隊。他の七大騎士団よりやや遅く設立された。他の六騎士団にいた女性が集まって作ったのが始まり。他国との大事な任務などを担当する。結婚した女性は退団しなければならぬを始めとしたこの騎士団限定の規則がある。人前に出るのが多いため、知名度はとても高い。男性だけで結成された西部の騎士団とは仲が悪い。

続く！

説明に聴き飽きただあ!?同感!

前回、ジジイの七大騎士団の説明で終わってしまったから、めんどくさくなつた方が多々いる事だろう。僕も同感だ。という事で・・・

「はい、ストッパー。ジジイ、あんた、説明がクソ長えなあ」

「知らん、お前が悪い。こんな事、生まれたばかりの赤ん坊からもうすぐお迎えが来るジジイまでみんなが知ってる常識なんだがな」

「あーハイハイ。つまり、話を要略すると、アーサランス王国の最強騎士団、七大騎士団があつて、それに僕には入れと、こういう事だろ?」

「その通りじゃ。わかつたならいい、早速行くぞ。」

「嫌だ。」

「は?」(フリーズするジジイ)

「僕はただだと自分のしたい事だけして生きたいんだ。人様のために頑張るなんてまっぴらだ。」

「お前、大丈夫か? 七大騎士団だぞ? 伝説の騎士団だぞ? 名誉と金が同時に手に入るんだぞ?」

「欲望が溢れ出てんな．．．」「わかった！このガキは七大騎士団を知らないから言えんだな。まあ、見れば入りたくなるだろ、よし行くぞ！」

「だーかーらー、行かねえつつてんだろ！」

なんて事を一時間近くジジイと僕はやり続けたが、ここは見苦しいのでカットする。さて、結論から行くと僕は七大騎士団に入らないことになった。僕は勝つたのだ！ワハハ！そして、ジジイは肩を落として、大瀑布の方へとフラフラと歩いて行つた。そうしたら10分後くらいにドガンと音がした。ま、ジジイが多分、落ちたんだろーけど、あのしぶといジジイがあれくらいで死ぬわけねーか。

そして、物語は変わる。七大騎士団にはぜつてー入んねえとか息巻いていた自称ハードボイルドも15歳、一人前の男となり、職業につかなければならない年になった。幼い頃からモンスターとの死闘に明け暮れていた彼が職人になれるはずもなく、しようがなく王都に出る事を決意した彼であった。

しかし、王都に行くにはこの時代、この世界では王都住民か、元王都住民からの紹介状が必要であることを知らなかった彼は王都の前で立ち往生してしまった。しようがなく、野宿でもしようかと、バッグを探った彼の右手にカツンとあたった紙が一枚、取り出してみると、あのジジイの紹介状だった。

よお、坊主。お前がこれを読んでいるという事はお前は王都に行くのだな。俺の苦勞

も無駄ではなかったか、お前には才能がある。王都でも頑張れや！ここにお前が王都に入るための紹介状を書いておく。最後に俺の名はジン、お前のおじさんだ。ワハハ！相変わらず、クソうぜえな、あのジジイは。ま、ありがたく使わせてもらうぜ。えーと、私、元王都住民、ジンはこのクソガキを七大騎士団に推薦します。

はア!?

続く！